



愛知県のお酒の消費動向について



昔から、お酒は「百薬の長」ともいわれ、お酒に関する伝統や文化が私たちの生活に深く浸透しています。しかし一方では、お酒の飲みすぎによる様々な弊害も指摘されています。

また、ライフスタイルの変化や嗜好の多様化、消費者の低価格志向等により、お酒の消費量にも変化がみられます。

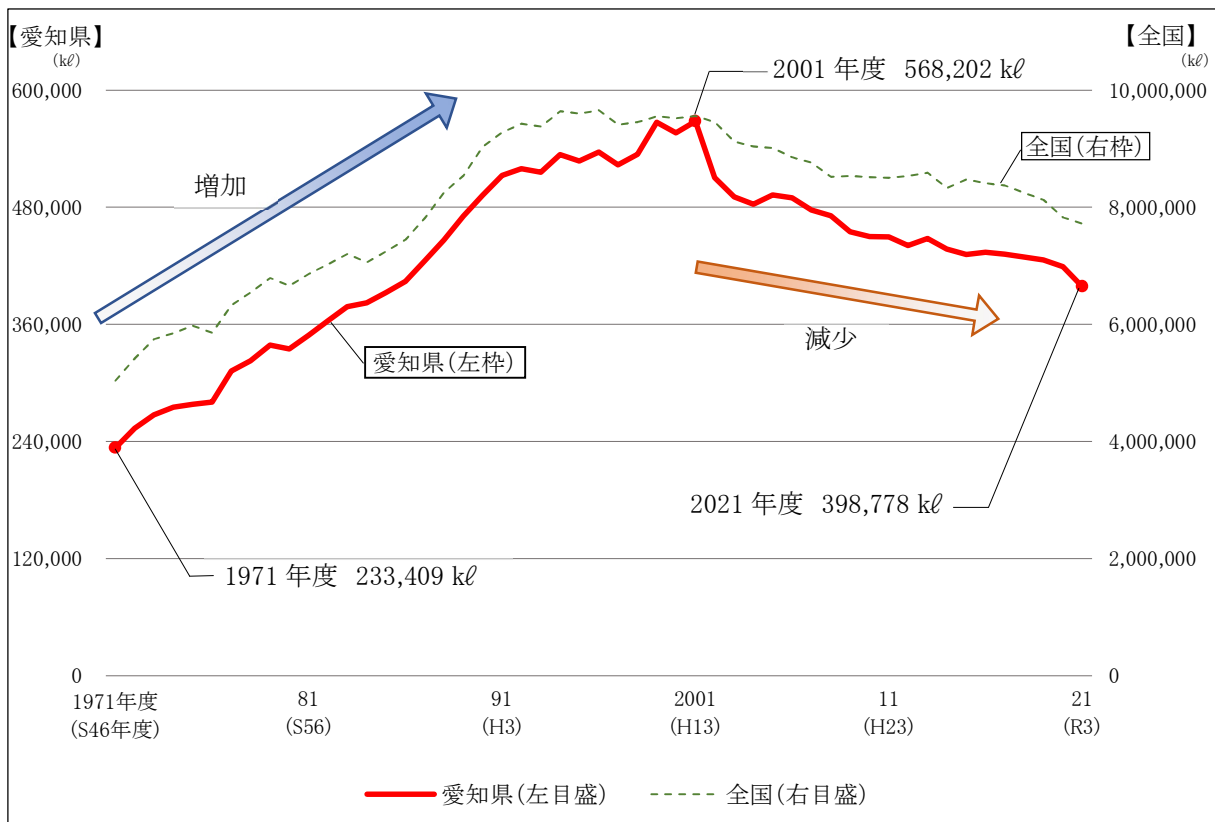
本トピックスでは、愛知県のお酒の消費動向について、国税庁の酒税に関する統計及び総務省の家計調査の結果を中心にまとめました。

1 愛知県のお酒の消費量について

愛知県の酒類販売（消費）数量の過去 50 年間の推移をみると、1971 年度は 233,409 kℓ となっており、以降は増加傾向が続いていましたが、2001 年度の 568,202 kℓ をピークにして、その後は減少傾向に転じ、2021 年度には 398,778 kℓ とピーク時の 7 割ほどに減少しています。

なお、全国の推移については、増減の割合が愛知県よりもやや緩やかとなっていますが、ほぼ同様の傾向で推移しています。（図表 1）

図表 1 酒類販売（消費）数量の推移



資料: 国税庁「酒税(酒類販売(消費)数量)」

2 愛知県のお酒の消費内訳について

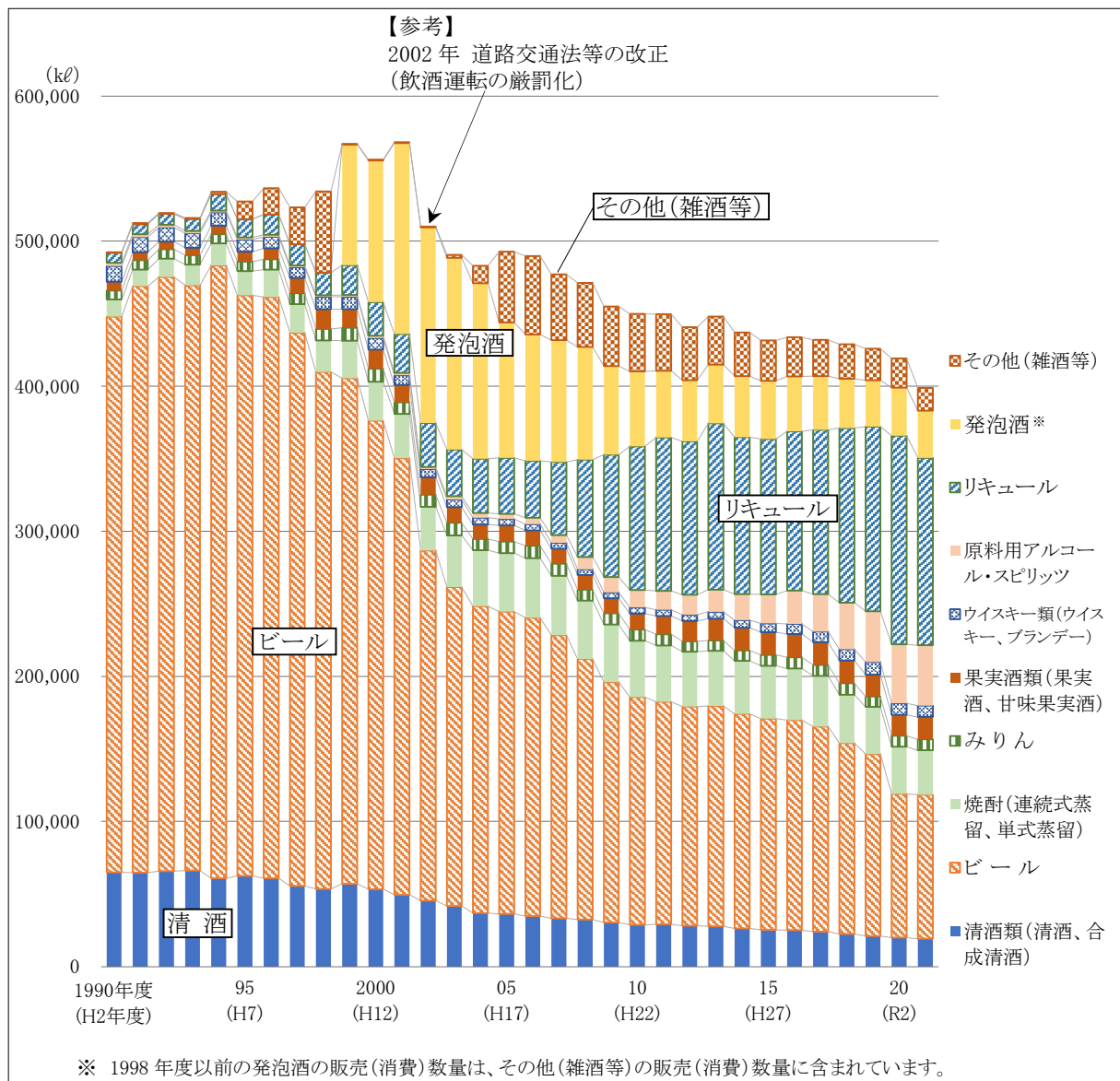
愛知県の酒類販売（消費）数量の内訳の推移をみていくと、90年代初めの内訳はビール8割、清酒1割、その他1割ほどで、大半をビールが占めていました。しかし90年代後半に入ると、その割合は徐々に変化していきます。

まずは発泡酒が販売（消費）数量を大きく伸ばしており、2003年度に全体の27.0%まで増加しましたが、その後は徐々に減少していきました。

発泡酒の販売（消費）数量が減少に転じた2004年度以降は、その他（雑酒等）やリキュールが増加しており、その他（雑酒等）は2006年度に全体の11.1%、リキュールは2020年度に全体の34.3%にまで増加しています。

なお、「その他（雑酒等）」や「リキュール」には、「その他の醸造酒（発泡性）」や「リキュール（発泡性）」といった「新ジャンル」と呼ばれているビール系飲料も含まれており、こういった酒類の多様化が消費内訳の変化に大きく関わっていると考えられます。（図表2）

図表2 酒類販売（消費）数量内訳の推移



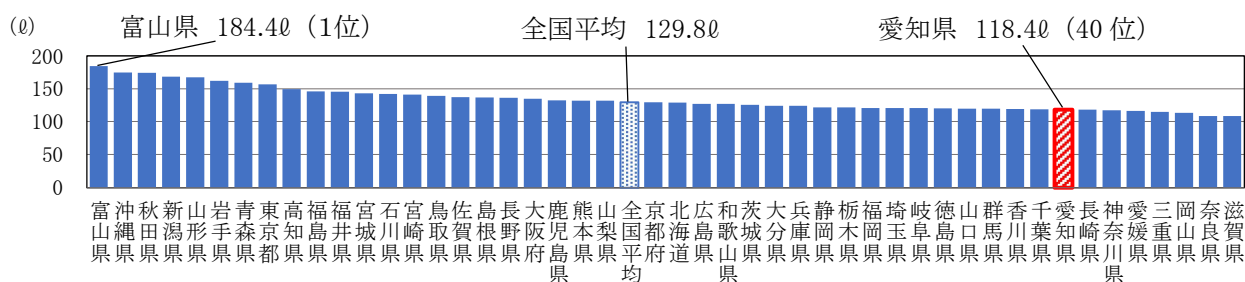
資料：国税庁「酒税（酒類販売（消費）数量）」

3 全国からみた愛知県のお酒の消費量について

2021年度の酒類販売（消費）数量を1世帯の年間酒類消費数量に換算し、都道府県別にみると、富山県が1位（184.40）となっており、愛知県は40位（118.40）で全国平均（129.80）を下回っているという結果になりました。（図表3）

（注）1世帯あたりの年間酒類消費数量は、2021年度の酒類販売（消費）数量を、住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数調査における世帯数（2021年1月1日現在）で除して算出しています。

図表3 1世帯あたりの年間酒類消費数量



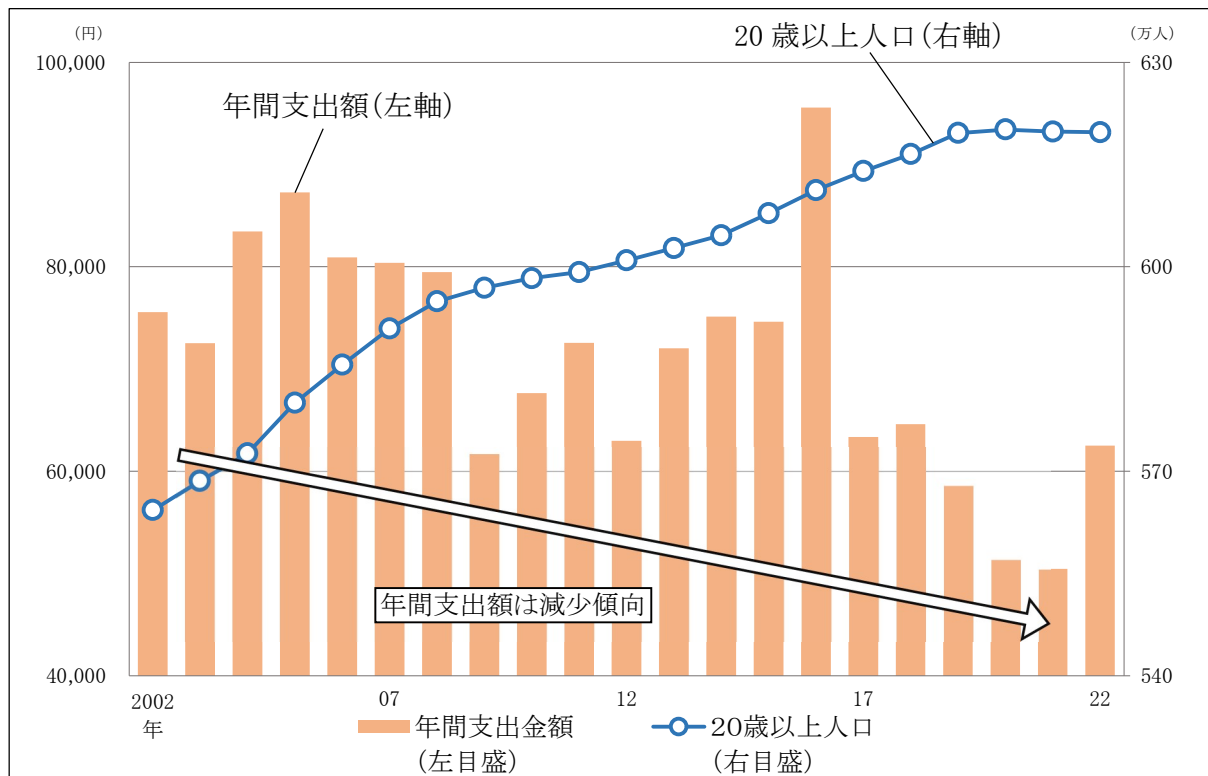
資料：国税庁「酒税（酒類販売（消費）数量）」
総務省「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数調査」

4 愛知県の1世帯あたりのお酒への支出について

愛知県（名古屋市）（以下「愛知県」という。）の過去20年間の1世帯あたりのお酒に関する年間支出額及び愛知県全体の20歳以上の人口の推移をみると、20歳以上の人口は2020年まで増加を続けていましたが、1世帯あたりの酒に関する年間支出額は上下動をしつつも、減少傾向で推移しています。（図表4）

（注）1世帯あたりの酒に関する年間支出額は、家計調査家計収支編の都市階級・地方・都道府県庁所在市別1世帯あたり年間の品目別支出金額の、酒類及び飲酒代の支出金額を合計して算出しています。

図表4 1世帯あたりのお酒に関する年間支出額及び20歳以上人口の推移



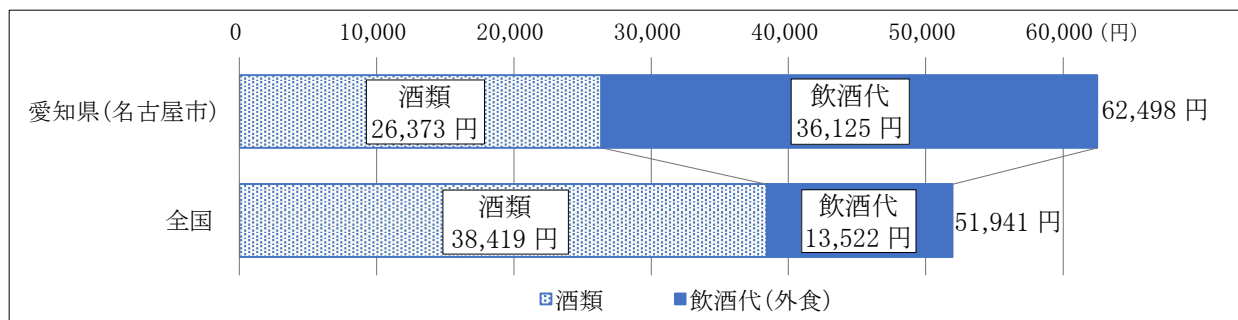
資料：総務省「家計調査」
総務省「人口推計」

次に、1世帯当たりの酒類及び飲酒代^{*}に関する年間支出額について、2022年の支出額の合計を愛知県と全国とで比較してみると、愛知県が62,498円、全国は51,941円となっており、愛知県の支出額は全国と比べて10,557円多くなっています。

支出額の内訳をみると、酒類への支出は愛知県が26,373円、全国が38,419円となっており、全国の方が12,046円多くなっているものの、外食における飲酒代は全国が13,522円なのに対して、愛知県は36,125円と、2倍以上の差がありました。(図表5)

※「飲酒代」は、家計調査の「外食費」のうち、主に飲酒を目的とした飲食代。

図表5 1世帯あたりのお酒に関する年間支出 (2022年)



資料：総務省「家計調査」

5 飲酒についての20年前との年齢階級別比較 (全国)

近年、お酒の消費量や家計からの支出額が減少傾向にある要因について、消費者の年齢という観点から、全国のデータをみていきます。

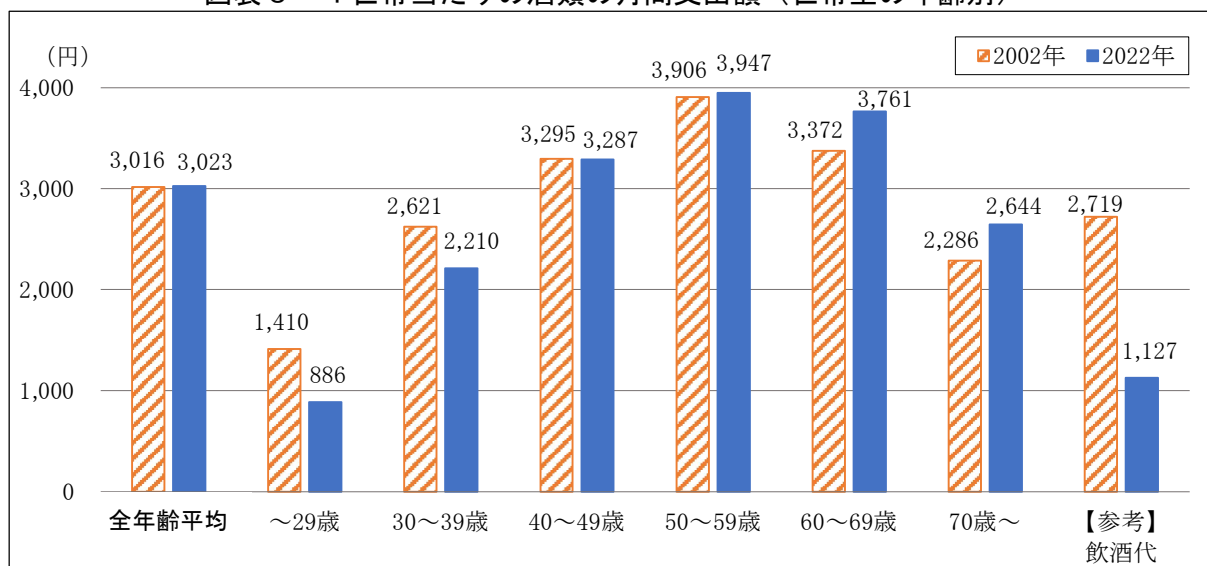
(1) 1世帯当たりの酒類の月間支出額について

全国の総世帯における1世帯当たりの酒類の月間支出額を20年前と比較してみると、2002年は3,016円、2022年は3,023円となっており横ばいとなっています。

しかし、この支出額を世帯主の年代別にみると、世帯主が50代以上の世帯では増加しているものの、50代未満の年齢の世帯では減少しており、特に20代~30代の若い世帯の世帯においては大きく減少しています。

なお、外食における飲酒代は、コロナ禍での行動制限による生活習慣の変化の影響もあり、全年齢平均の支出額は20年前と比べて半減しています。(図表6)

図表6 1世帯当たりの酒類の月間支出額 (世帯主の年齢別)



資料：総務省「家計調査」

(2) 年齢別飲酒習慣のある人の割合について

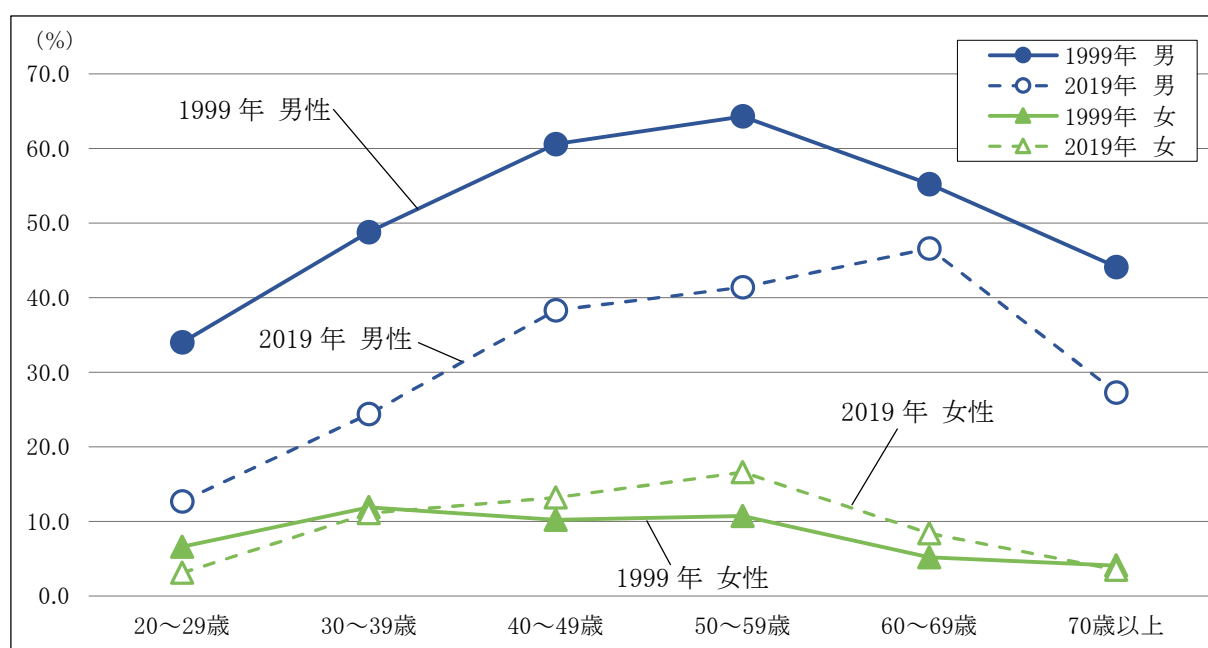
飲酒習慣のある人^{*}については、厚生労働省が国民の健康状態、生活習慣や栄養素摂取量を把握するために全国を対象として行っている「国民健康・栄養調査」により調査が行われています。

この飲酒習慣のある人の年齢別割合を 20 年前と比較してみると、男性ではいずれの年代においても減少しており、女性については、40～60 代については増加しているものの、その他の年代では減少しています。

このように近年は飲酒習慣のある人は減少しており、また若い世代ほどその減少割合が大きくなっています。(図表 7)

※ 「飲酒頻度、週 3 回以上」「1 回で飲む量が酒で 1 合(ビールで大 1 本)以上」の双方に該当するもの

図表 7 年齢別飲酒習慣のある人の割合



資料:厚生労働省「国民健康・栄養調査」

〇おわりに

愛知県で消費されているお酒の量や家計からの支出は、ここ 20 年程ではともに減少傾向となっています。ただし、消費されているお酒の種類については、多様化している様子がみられました。

また、最近の状況を愛知県と全国で比較すると、1 世帯あたりのお酒の消費量は全国平均と比べて少ないものの、1 世帯あたりの支出の中で、外で飲む事に使う金額は全国よりも多くなっています。

なお、全国のデータからは、ここ 20 年程で特に若い世代のお酒離れが進んでいるという傾向がみられました。

お酒は 20 歳を過ぎてから。
 ※20 歳未満の者の飲酒は法律で禁止されています。